

サハリン事務所現地レポート

2019年5月

(件名) 樺太を描いた芸術家の作品を求めて

報告者：主査 阿部 大祐

かつて樺太の自然を愛し、当地の風景と植物画を版画の形で残した船崎光治郎という芸術家がいる。彼は東京から樺太に何度も渡り、この地の自然に心を打たれ居を置いたが、戦後、彼の名は忘れられその作品も散逸し伝わらなかった。今回は、この芸術家の幻の作品を求めて当地を訪問した美術史家・高橋十志氏と当事務所の取組について報告する。

高橋氏は、30年前、偶然立ち寄った古書店で船崎の作品に出会い、彼の描く伸びやかな線と明るい色調に魅せられ、以降、彼の作品を探してきたが見つけれず、かつて船崎が滞在した当地にやって来た。高橋氏は、自らのコレクションとサハリンで眠っている船崎の作品を見つけ出し、日露の歴史のなかで樺太に生きた芸術家の展覧会を北海道とサハリンで開催したいと考えている。

当事務所としては、この高橋氏の取組を文化交流と位置づけ協力することとし、まず、ユジノサハリンスク市在住の歴史家であるサマリソフ氏のもとを訪れて、作品の発見について助言と協力を仰いだ。また、高橋氏はサハリンの市民にこの芸術家のことを知らしめるべくビデオメッセージを作成し、当地で日本料理店を営み知己の多い宮西氏に現地テレビ局での放送について依頼をした。さらに、現地インターネット新聞に記事掲載の依頼をした。読者の反応は「素晴らしい作品」、「きっとサハリンのどこかにあるはずだ」、「行ったこともない景色だが絵で見られてよかった」など肯定的なものが多かった。

当事務所として可能な限りのことをしたが、船崎の作品がサハリンで見つかるかはわからない。しかし、かつて樺太を愛し、その自然を美しく描いた芸術家があったことを市民に広く知ってもらえたということに意義があったと言える。今後、作品が見つかり、展覧会を開催し、道民やサハリンの人に船崎の作品を見てもらいたい。当事務所は引き続き協力していく。



「樺太名勝八景」のひとつ



「高山花譜」の挿絵



新聞の記事掲載依頼

(件名) 第20回 日本語スピーチコンテスト

報告者：主査 出野 翔大

5月17日ユジノサハリンスク市において日本語スピーチコンテストが開催された。同大会は北海道・サハリン州政府・サハリン国立総合大学の共催で、第20回記念大会となる今回は過去最多となる22名(児童・生徒の部10名、一般・大学生の部12名)のロシア人が参加した。

児童・生徒の部では、平等な社会を望み多言語を学びながら国際学校UWCで世界一の教育を受けたいという夢について発表したジェン・アントニーナさん(3番ギムナジア8年生、テーマ「わたしには夢がある」)が優勝し、一般・大学生の部では、スポーツ大会でのボランティアを通じて学んだことを発表し、東京五輪でのボランティアも目指すという、ルバン・マリアさん(サハリン国立総合大学2年生、テーマ「スポーツボランティアから学んだこと」)が優勝した。マリアさんには大会20回記念特別賞として2泊3日の札幌研修旅行が授与された。

発表前には何度も繰り返し見てきたと思われるメモを握りしめる様子からこちらにも緊張が伝わってきたが、本番では生き生きと楽しそうに発表する出場者の姿に感心させられた。20回目を迎えた本コンテスト出場者の数は250名を超え、日本と関係する仕事に就いている人もサハリンで多く見られる。今後も継続していくべき行事であると強く感じた。



表彰後集合



マリアさん



アントニーナさん